



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	世紀転換期における雲南の歴史再建：雑誌『雲南』とその増刊『滇粹』を中心に
Author(s)	董, 子昂
Citation	国際広報メディア・観光学ジャーナル, 30, 23-41
Issue Date	2020-04-15
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/77575
Type	departmental bulletin paper
File Information	04_dong.pdf



世紀轉換期における雲南の歴史再建 —雑誌『雲南』とその増刊『滇粹』を中心に—

北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院 博士課程

董 子昂

Reconstructing historiography of Yunnan at the turn of century — Focusing on *the Yunnan Journal* and its extra issue *Diancui*

DONG Ziang

abstract

This paper describes the nationalistic historiography of modern Yunnan from the end of the 19th century to the beginning of the 20th century. This period is regarded as an important turning point for China to transfer from Tianxia ("all under heaven"), the traditional order into a nation-state. However, at the time, Yunnan seemed to lack the inevitability of entering the newborn nation-state of China due to its distinctive history and the existence of non-Han peoples. This paper analyzes *the Yunnan journal*, a Chinese periodical published in Tokyo, Japan in the 1900s and its extra issue *Diancui*, and argues that the "history" of Yunnan, which followed the conception of building a homogeneous China (a Han China), has been reconstructed. As a result, the non-Han peoples, especially one of their leaders participated in the Chinese Revolution (1911-1912) with the Han identity. Through this paper, we can confirm that comparing with nationalism theories of primordialism, theories of modernism are more convincing.

1 はじめに

1.1 問題の所在

中国における伝統国家から近代国家への転換は、19世紀の末から20世紀初頭にかけて、儒教に支えられる道徳的な概念や文化主義的な「天下」観がナショナリズムに取って代わられる過程であると考えられている（Levenson 1968：99；溝口 1989：125；金・劉 2008：221-246）。この時期は「近代中国の思想転換の時代」と呼ばれ、新聞雑誌など知識を伝える新たなメディアの出現、伝統的な紳士と異なる近代的知識人の誕生による、ネーションあるいは国民国家に対する追求によって特徴づけられる（張 1999）。

中国のナショナリズムの勃発とほぼ時を同じくして、近代的知識人による中国の「国史」の構築を目指す史学運動が展開されていた。そこでは近代的概念であるネーションが歴史の主体としての位置に置かれ、中国のネーションの古い起源、栄光の歴史と現在に至るまでの連続性など、一連の新しい歴史叙述の規範が規定されたのである（Zarrow 2003）。

ただし従来の研究の多くは、中国内地に出自する漢族知識人のみに注目してこの問題を論じてきた。それに対して本稿では、以下の三点に主要な関心をおき、古代以来、常に「周辺」¹ 的位置づけにあった雲南に注目し、近代ナショナリズムの高揚によって行われた「国史」の再建運動について、「周辺」の視点からの再検討を試みたい。

第一に、雲南は自ら政権を建てた歴史を持ち、中国の中心部の諸省より高い独自性を有する地域である。歴史的に「周辺」とされ、中原王朝と断続的な従属関係を維持した雲南の歴史が、近代になっていかに「国史」の範疇に収められたのかに注目する。

第二に、清朝末期における民族意識の出現に伴い、「漢族」主体の単一民族国家の歴史再建を目指し、血縁の繋がりに基づく高度な排他性を有する「国史」の記述が、圧倒的な影響力を獲得するようになった（沈 2000）。大漢族主義の色濃い史学運動の中、祖先から雲南で暮らしていた漢族以外の先住民、すなわち非漢民族の人々がどのように「国史」の論述に包摂されたのかに注目する。

第三に、「周辺」に生きる人々は、政治・経済・文化面での影響力が優位を占める中心より自分のアイデンティティーに敏感であり、自分の過去に対して、ある種の帰属意識を強く堅持する一方、他の記憶を忘却しようとする傾向を示す。したがって、「周辺」の人々に対する着目点は「彼らは誰か」から「なぜ彼らは自分が何者であると主張するようになったか」への解明に移転すべきだと指摘されている（王 1997：7-15）。

以上より本稿は、「周辺」に位置する雲南の人々が「なぜ自らが近代国家の中国に属する者であると主張したか」を説明するために、彼ら自身の視点

▶1 「周辺」とは、政治の中心に対する独立性が強く、経済的には中心との結びつきが弱く、地理的には中心との距離が遠い地域をさす（石島 2004：1-4）。

に注目し、「当事者」の言説の分析を通じて、雲南に関する新しい歴史叙述が再建された過程を辿っていく。

1.2 先行研究とその課題

中国のナショナリズムに関する先行研究において、特に中国の研究者は伝統と近代との断絶の有無を巡って、近代主義のパラダイムに対して批判を提起してきた。たとえば葛は、「中国は […] 文化共同体として、長い歴史の過程で、極めて明確な連続性と安定性を保ち続けていることは確かである」と述べている（葛 2017:71）。また、「中华民族は単なる想像の共同体ではない」と主張した温（2014；2008）は、中国の西南部にいる漢民族ではない「夷」が前近代から連続性を保つ中国に「整合」²されたと考えている。程度の差はあれ、これらは「ネーション」の歴史に存在する根源を主張し、「想像の共同体」論を拒否する姿勢を示している。

このような考え方が、ナショナリズムに関する「実在論」と「構築論」の間の争いにも見られる。アントニー・D・スミスは近代主義を批判し、前近代に存在したある種の共同体と近代国家との繋がりを無視できないと指摘している。さらに、スミスはベネディクト・アンダーソンの「想像の共同体」論に対して、ナショナリズムがもつ大衆の心を動かす力、および「想像」された共同体が人々の献身の対象へと転換する必然性を説明できなかった、と批判している（Smith 1999：8-10）。

近代雲南の社会史に関する先行研究について言えば、国民国家概念やナショナリズムの形成に大きく関わるメディアに対する研究が不足している。近年、近代中国の社会史とメディア史に関する研究では、世紀の転換期に出版された新聞雑誌がもたらした知識生産の手段と思考様式の変遷、及びメディアと地域、及び人の動きとの連動が注目されている（卞 2015；李 2007:3-49；王 2017；孫 2014）。それと対照的に、近代雲南の社会史とメディア史に関する先行研究では、雲南の知識人により発刊された定期出版物である雑誌『雲南』が、雲南社会にとって一つの重要な転換点である辛亥革命の成功に寄与した、という評価にとどまっている（蒋・王 2011；木 1996；宣 2003；周 2007）。このような評価は複数の勢力がせめぎ合う結果としての辛亥革命を単純化すると同時に定期出版物がもたらした雲南知識人の思考様式の変遷を看過している。

日本では、雲南の近現代史に関する通史的な研究が行われている（石島 2004；川野 2013：238-251）。また吉川（2008：52-95；2017）による近代雲南の知識人とナショナリズムについての専門的な研究も見られる。これらの研究に対する本稿の特色は、主な検討対象とされていない雲南の知識人による「国史」構築という問題を主題とする点である。

また、雲南で起きた辛亥革命に関する先行研究では、革命に参加した非漢民族の位置づけが明らかになっていない。無論、満州族排斥を唱え、清王朝を覆した辛亥革命は大漢族主義的の色が濃い（佐藤 2015：214）。しかし、中国で行われた研究は、マルクス主義的な革命史観や、少数民族の愛国心といった観点から雲南に生きる非漢民族の革命参加を解釈していた（陳・孫

►2 「整合」とは、中国の各地域には、地域の差があっても、王朝の制度とそれに対する認識、及び王朝との一体感が普遍的に存在していた現象をさす（温 2008：2-8）。

1986；曹 2010)。

一方、日本で行われた先行研究は非漢民族の革命参加に新たな視点を提示している。横山（1997：164-198）は、清末期の雲南の非漢民族の首領が中華ナショナリズムの影響を受けて革命参加を実現した、と指摘している。武内（2008：189-224）は、清末期から中華民国期における雲南の西南部にいるタイ系民族の近代化の道程を辿った。二つの研究により、非漢民族の位置づけが解明されたが、それと対比される漢族知識人の見解が欠けている。

1.3 方法と目的

果たして中国は「連続的で明確な文化共同体」であるのか。具体的な歴史事件の観点から、雲南に生きる非漢民族の革命参加は、いかにして可能になったのか。また、それをどのように解釈すべきか。

地域研究のアプローチを採ることで、世紀の転換期の雲南ナショナリズムの形成とその構造を明らかにすることが可能になると考えられる。地域研究は、まず「中国」をめぐる解釈の視点の多元化を求めると同時に、独立した一つの研究単位としての「中国」の妥当性に疑問も投げかけている。魯（2014：8）の指摘によると、中国の歴史は単一の軌跡に沿って発展してきたわけではない。それぞれの地域に歴史を形成する出発点、過程及び方向などの根本的な違いがある。また、劉・孫（2014：98）は地域の特殊性を度外視する「超時空の中国研究は曖昧な解釈しか提供できない」と指摘している。よって、「地域」を限定することで、特定の歴史的条件下における「中国」を議論することが可能になる。中国の伝統と近代の間の断絶を考察するためには、その節目からの分析が不可欠である。さらに、近年盛んに行われている「中央」と対比される地域としての地方、特に「省」を巡る研究からの示唆も大きい。程（2006）と王（2016）の研究によれば、大量の地方文献に対する分析を通じて、地方の特質と国家主流とのせめぎ合いという観点から国家への一体感を強めるナショナリズムの形成をよりよく説明できる。

上述の研究成果を踏まえて、本稿は、中国の西南部に位置する地方である雲南の歴史を振り返りながら、雲南の知識人が20世紀の初頭に発刊した新聞雑誌を対象に、質的テキスト分析を通じて、「国史」再建の背景で彼らが描いた雲南の歴史像を解明することを目的とする。雲南の歴史が「国史」の記述規範に沿って再構築された過程、及び「国史」に巻き込まれた非漢民族の議題を分析した上で、共同体が前近代から近代へと転換した時に起こった「天下」と「国家」の断絶と重なり合いから、ナショナリズムの近代的性格、および現代中国の公定史観にも影響し続けている政治的ダイナミズムを検討する。

具体的には、1906年から1911年にかけて雲南籍の留日学生が創刊した雑誌『雲南』とその特別増刊号である『滇粹』をテキストとして文献分析を行う³。『雲南』は1906年に雲南籍の留日学生が東京で出版した定期出版物である。『滇粹』は1908年8月に雲南の歴史を紹介するために発刊された特別増刊号である。『雲南』と『滇粹』は、地域の視点に根ざしつつ地域にまたがる人や思想をつなぐメディアとして、「内的な視点」から世紀の転換期の雲南が起こっ

▶3 本稿が使う『雲南』と『滇粹』は、京都大学所蔵の『雲南』十四号と佛光大学所蔵の『滇粹』を除き、雲南省省図書館所蔵の『雲南』のマイクロフィルムとデータベース（全国報刊索引）を用いて筆者が収集したものである。

た思考様式と歴史の語り方の変遷を観察するための材料となる。

2 雲南の歴史：「天下」の片隅から「中国」の一部へ

2.1 「天下」と雲南

前近代期の雲南の歴史は、天下に巻き込まれる過程と言える。天下とは伝統中国の世界観であり、字面上の意味からすると、天下は「天」の意志を代表する天子（皇帝）が支配する無限に広がる領域をさす。天下は通時的、普遍的な存在であるが、王朝は天下を領有する称号だけで、個別の具体的な存在である（渡辺 2003：20）。天下と呼ばれる領域は、「中原」と「四夷」、つまり中華と中華の周囲にある異民族の地域によって構成され、「徳」や「礼」など儒教の道徳的規範を通じて維持されている。天子は「徳」を通じて天下を「教化」する。「礼」を備えた地域は「内」と呼び、郡県を設置する。反対に、「礼」を持たない地域は「外」と呼び、冊封を行う（甘 2007：1-51）。

雲南は、紀元前2世紀から13世紀までは天下と一定の距離を置き、中原王朝の支配から比較的高い自主性を保っていた。紀元前2世紀から1世紀ごろの前漢時代には、現在の雲南の中部と西部に二つの中心地域が形成された。一つは滇池の東南に中心をおいた滇国であり、もう一つは遊牧系の人々が散居した雲南西部の洱海地区である。3世紀から、雲南の東北部に「南中大姓」と呼ばれる雲南社会の上層部を構成する豪族である爨氏一族が現れた。同時に、洱海地区に「張氏白子国」と呼ばれる勢力が存在したとされている（林 2001：147-171）。

雲南の東北部から出土した5世紀の石碑には、爨氏に関する記録が残されている。「寧州刺史」などを称した爨氏は雲南の東部から東南部、中部まで勢力を伸ばしていた。6世紀、国の統一を完遂し、拡張路線を踏み出した中央王朝であった隋に対して、爨氏は隋の討伐を受けつつ隋に抵抗し、最終的に王朝との関係を断絶して、自らの支配区域を確保したと考えられている（気賀澤 2017：83-115）。

7世紀の後半から、チベットでは吐蕃王朝が勃興を遂げて、唐王朝との緊張関係が高まった。同時に、洱海地区には、「六詔」と呼ばれる6つの政権が出現した。六詔のうち、最も勢力の強い蒙氏は、洱海地区の諸勢力に対する支配権を確立した後、爨氏政権の内部分裂を利用し、滇池地区に出兵し、爨氏を制圧した。結局、雲南の全域は蒙氏に掌握され、「南詔」の支配下に置かれた。10世紀、南詔が滅亡した後、30余年の混乱を経て、段氏が雲南を再統一し、大理国を建設した。南詔・大理国の時代は、13世紀の半ばにクビライの軍事征服が到来するまで雲南における最初で最後の統一時代であった（林 1999：33-50）。

13世紀の半ばから20世紀初頭までの元、明、清代は、雲南が王朝周辺とし

て「内地化」⁴する道を歩き続けた時代である。1253年、元は大理国を攻略した。行省制度を導入し、行政中心を大理から滇池区域に移した元朝の中央政府は、雲南の先住民を管理するため、「土司制度」を設置した。「土司制度」はある種の間接統治の手段として、諸民族にその居住地、出身地の文化、社会、習俗を持たせる一方、王朝への承認と服従を求めるものである。土司制度は王朝の中央政府が「夷を以て夷を制す」という発想から周縁地域の「内地化」・「漢化」を目的に推進された制度であると考えられている（王 2014：151-154）。

明清期の雲南は、ある種の混合体制によって統治されていた。行省制度をほぼ継承し、中央から官僚を派遣する制度を設けた一方、明、清王朝は引き続き土司制度を採用していた。また、儒学の影響を拡大するため、王朝の官僚登用試験である科挙を雲南に導入し、科挙に参加する資格を土司の人々にも与えた。さらに、明前期から、移民政策の推進により大量の漢人が中原から雲南へ流入した。これより、雲南の風土が大きく変わった。

王朝が雲南を統治した結果、多数の非漢民族が存在したにも関わらず、雲南は常に「内地」と考えられるようになった。結果として、地方誌という、天下における雲南の位置づけを反映する地方文献が大量に残された。地方誌をみれば、元、明、清代を経て中央王朝が行った雲南統治の具体的な影響を解説できる。

雲南現存の最古の地方誌は、14世紀に完成された『雲南志略』である（方 1981）。『雲南志略』によると、雲南の中心部にある大理一帯に居住した「白人」は、元朝期には儒教のイデオロギーが完全に浸透しておらず、「蛮」と見なされた⁵。しかし、17世紀前半、明の天啓年間に編纂された『滇志』においては、「白人」は既に「その習俗が華人と大きな差異がない」⁶と記録されている。清になると、社会の上層部の「白人」が先住民と区別し、自らの祖先を中原出身と説いて、自らを「蛮」と見なさないようになった。例えば、『雲南通志稿』を編集した王崧は、祖先が「白人」であったが、自ら墓碑に原籍を「江南上元県」と記した。これは、中華世界の膨張により、雲南が天下に吸収され、王朝の一部になる前提で行われた知識生産の結果であると考えられている（王 2008：97-118）。

また、雲南の周縁部にいた非漢民族についても、地方誌には天下が拡張した経緯が記録されている。「金齒百夷」と呼ばれた雲南の西南部にいる人々は元の時代に「横柄で乱暴であり、紀律がない」、「動物のように淫乱」⁷と形容された。元の時代に雲南の西南部には5種の先住民がいたと記載されていたが、王朝統治の推進により分類が詳細になり、明の時代には14まで増加し、清の時代になるとその数が24になった⁸。

これらの地方誌は、天下が連続的に雲南に与えた影響を記録している。しかし、代々受け継がれた王朝を貫く天下は近代の到来によって打破された。

2.2 「新史学」・ニューメディア

20世紀初頭から、天下を代表する王朝の歴史を脱却し、「新史学」という中国に関する新たな歴史叙述を構築しようとする史学運動が展開された。人

▶4 王（2014：103-154）の指摘によると、「内地化」とは儒学教育や土司制度などの手段を通じて、「周辺」の人々が天下の觀念を取り込み、中原王朝に統治される正当性を認めることである。この意味で、非漢民族が自ら風俗を改め、中華文化を吸収することは「漢化」と呼ばれる。

▶5 李京撰・王叔武校注（1986）『雲南志略輯校』雲南民族出版社、pp.88.

▶6 劉文徵撰・古永繼校注（1991）天啓『滇志』卷三十・羈縻志・種人、云南教育出版社、pp.998. 「華人」は「中原の人」、「内地の人」をさす。

▶7 李京撰・王叔武校注（1986）『雲南志略輯校』雲南民族出版社、pp.92.

▶8 劉文徵撰・古永繼校注（1991）天啓『滇志』卷三十・羈縻志・種人、云南教育出版社、pp.996-1002；阮元・王崧等撰（1835）道光『雲南通志稿』卷百八十二・南蛮志・種人（ハーバード燕京図書館蔵、<http://fig.lib.harvard.edu/fig/?bib=007488498>、参照2019-10-20）

- 9 漢駒 (1903)「新政府之建設」『江蘇』五号

- 10 本稿は現在でも残っている刊行物のみを計算しているが、別の調査手法に基づき、当時日本で発刊された中国語の刊行物を109紙(誌)とする説もある(方2002:114)。

- 11 雲南雜誌社(1908)「周年記念代派処及臨時代理処址」『雲南』十四号

- 12 李根源(1966)『雪生年録』沈雲龍編『近代中国史料叢刊』文海出版社, pp.19-22.

- 13 雲南雜誌社(1906)「発刊詞」『雲南』一号

種に関する新たな言説の影響により、本来天下の中で境界が曖昧であり、「礼」があれば内地の民と同一視できる「族類」は、先天的で変更不能な「人種」に区分されていく(Dikötter 2015:61-78)。結局、天下の意志を継承した清は、中国を代表できない満州人が建てた異族の朝廷と見なされ、「種族革命」と政治革命を提唱した「革命派」と呼ばれる人々から激しい攻撃を受けた。

「新史学」の旗手であった梁啓超は、「種族革命」に反対し、満州族、漢族、モンゴル族、回族、チベット族、及び苗族を一つの「民族」に融合する「大民族主義」を提唱していた。しかし、1905年から反満革命を目指す同盟会の成立によって、「血統、地理の範囲、歴史、文字いずれも同じである黄帝民族を集め、一つの民族の国家を組織しよう」⁹という漢族単一民族国家論の主張が、世論の主流を占めるようになった。「国史」を再編する担い手も、梁啓超から「国学を発明し、国粹を保存する」というスローガンを掲げる「国粹派」と呼ばれる人々に移転した(Wang 2002:185-208)。

1898年の戊戌変法から1911年に清を滅ぼした辛亥革命までの13年間には、膨大な数の新聞雑誌が中国内外で発刊され、中国を一つの共同体として「想像」することが初めて可能になった。中でも「遠隔地」としての日本では、少なくとも66紙(誌)の新聞雑誌が創刊され、近代中国ナショナリズムの形成に無視できない影響を与えた¹⁰。

1904年8月、雲南籍の留日学生は雲南同郷会という留学生団体を結成した。雲南同郷会の会員は雲南雜誌社を組織し、1906年の秋に東京で雑誌『雲南』を創刊した。1906年10月に出版されてから1911年に廃刊となるまで、『雲南』は清政府の審査や資金基盤の不安定などの理由で2回停止されたが、計23期の雑誌が世に送り出された。1908年8月、『雲南』発刊一周年の特別増刊号である『滇粹』が発行され、中国、日本を除く、ベトナム、ミャンマー、シンガポールの各地、計38箇所販売された¹¹。また、『雲南』の発行部数は当初3千部未満であったが、最多で一万部余りにも達した(本1996)。さらに『雲南』は、東京本社以外に、北京、昆明、マンダレーなどで支社を設立した。『雲南』は、同時期の新聞雑誌と比べて、発行期間の長さ、部数の多さ、刊行地域の広さなどの重要な特徴をもつとも言えるだろう。

当時、東京振武学校に留学した李根源は、1905年6月に同盟会に参加し、のちに雲南留学生同郷会会長を務め、『雲南』の編集主幹を担当した¹²。同盟会雲南支部の会員名簿を見ると、『雲南』の編集者グループ、つまり李根源、呂志伊、趙伸などは全員が同盟会に所属していたことが分かる(段2015)。『雲南』は、地域の特性を帯びる一方、革命派との密接な関わりを持ち、反満革命や、大漢族主義的な思想から影響を受けたと言えよう。

『雲南』の「発刊詞」には、創刊の主旨である9つの思想が紹介された¹³。筆頭にあるのは「国家思想」である。国の強弱と存亡の責任は一人一人の国民にあると述べた『雲南』は、まず雲南が中国の一部に属するという強い国家一体感を示していた。

そして、雲南が「中国」の一部になった歴史的根拠を説明するために、『雲南』には滇国や南中大姓、南詔・大理国など雲南独自の歴史ではなく、「莊蹻」という中原の人物に関する伝説が掲載された。

莊蹻は戦国時代の楚国の将軍と言われる。命令を受けて南方に進軍して夷狄を討伐し、雲南を平定した莊蹻は、現地に留まって「滇国」を成立したとされている。このような中華出身の英雄が中華の「周辺」の王になる「英雄祖先の神話」は、「周辺」に生きる人々に自ら中華との繋がりを説く依拠を提供したと指摘されている（王 2009：119-148）。

早稲田大学に留学した呂志伊は、「雲南は、莊蹻が遠いところに遷って以来 […] 長い間中国との隔たりがなくなっていた。しかしそれが完全に漢族の雲南となるのは、先の明代から始まり、[この現象は] 明の初期から残り伝わる」¹⁴ と、雲南と中国の歴史的な繋がりを指摘した。

この記述によって、雲南の歴史は大漢族主義的な叙述の規範に沿って一転させられた。「英雄祖先の神話」は、中国文明の「起源」とその「周辺」への伝播を反映した、と王（2009：1-8）が指摘している¹⁵。しかし、莊蹻の伝説から雲南と中国文明の「起源」の繋がりを説明する研究は、Evans（2014）が行う南詔・大理国の歴史をタイやラオスのネーションの起源とみなす研究と同様の視点に基いていると考えられる。実際、ネーションに関する意識は予想されるような遠い過去からではない、とトンチャイ・ウィニッチャクン（2003：276-287）が既に解明している。

3 『滇粹』：雲南の「精神」を探る

タイトルから見れば、『滇粹』は雲南の略称である「滇」と、「精神」の意味を持つ「粹」によって構成されている。言い換えると、『滇粹』は「雲南の精神を伝える」という意味を含んでいる。内容としては、『滇粹』の文章は政府が編纂した「正史」や地方誌と違い、民間に流布していた史料、特に雲南本土の人物が書いたものが大部分を占める。

『滇粹』に引用された文章には、明朝が崩壊した後、清を中華の外にいる夷狄とみなし、朝廷に帰順しない「遺民」と呼ばれる人物が書いた文章が多く見られる¹⁶。彼らは伝統的な儒教の観念を守り、華夷秩序からみて清が王朝を接収する正当性はないと訴えた。このような清に対する怨恨は、清末になると満州族排斥の世論によって再び喚起された。

反満の立場から言論活動を行い、雲南の「精神」を伝えるため『滇粹』を発刊した近代雲南の知識人は、何を通じて、どのような意味で雲南の「精神」を語ったのか。実のところ、天下の歴史と異なる雲南の「歴史」を再創造しようとする動きには、史実に対しての隠蔽、改竄、ないしは歪曲が含まれている。

3.1 単一民族国家史観の下での雲南史

『滇粹』では天下の連続性が否定され、王朝の正統性を判断する基準についても、伝統的な「族類」よりも、エスニック・グループとしての意味合い

▶14 呂志伊（1908）「施武詩」『雲南』十六号

▶15 王（2009：1-8）は、ナショナルリズムの構築論や近代主義に反対し、英雄祖先の神話から中国ネーションの起源及びその一貫性を説いた。このような指摘は伝統に冷淡な近代主義を補充するものとなると考えられる。しかし王（2009：189-208）の分析には、伝統と近代と大きな断絶が起こった時期に対する必要な説明が不足している。

▶16 Struve（2004）は明清交代期の知識人の思想状況を分析している。『滇粹』に収録された史料の作者である師範、鄧凱、劉彬、宋潜虚はいずれも「遺民」とされる人物である。

が強くなっている。そのため、「非漢族王朝」と見られた元は、雲南の王朝統治に大きな役割を果たしたにも関わらず、漢族の「旧来の領域」を奪った野蛮人として攻撃された。

洪武八年（1375年）、[皇帝は] みことのりを発して諭す。曰く、「最初元虜が中華を乱して、中原で大乱が起こり安定しない故に、朕は兵を起こし、元虜を追い払って殲滅し、我が旧来の疆域を回復し、中華を統一した。それ以来7年を経て、四夷と中国は共に[拝伏することを] 告げ知らせた。臣を称しないところがない。ただあなた大理のみは国王の称号が見つからず、使者を派遣したこともない。今年の秋、翰林院の承旨学士である詹同は多くの書物を献上し、閲覧してからこそ、このことが分かった。西南にある大理は昔唐宗の時に王の爵位を授けられたが、元に国名を削り去られ、土官まで呼ばれる。その地方は元虜が派遣した王のような者によって管理される」¹⁷

- ▶17 師範（1908）「征南將軍穎国公 傅友德伝」李根源・呂志伊編『滇粹』, pp.28-31.

この文章は、北方民族が中原に侵入して中華の旧来の秩序を乱したため、兵を挙げて元を殲滅した明は中華を代表する正統性を有する、と説いている。そして、明が雲南に出兵する理由は、雲南は中華から遠い地域に位置しているが、「旧来の領域」に属するため、「元虜」の支配下から「回復」しなければならない、ということにある。

雲南の歴史上、元以前に雲南が中原王朝に直接に統治されたことはない。しかし、雲南が王朝の旧来の領域の地域に属することを説明するために、『滇粹』の編集者は、王朝との実質的な関係を大理国が唐の封爵を受けたことに求めた。この文脈からすると、大理国は唐王朝の地方政権として位置づけられ、王朝の一部に属すると見なされる。

大きな歴史の断絶が起こることを承知の上で、『滇粹』の編集者がこの文章を掲載した理由は、「夷狄に乱された中華を回復する」言説が現実的には満州族排斥という意味合いを含んでいるからだと思われる。清を「夷狄の朝廷」と見なし、雲南を含める「中華」を回復することはまさに革命派の影響を受けた『滇粹』の編集者の目標であった。そして、王朝と国家の分離に伴って再構築された雲南の歴史叙述においては、雲南の独自の歴史も大漢族主義の発想によって抹消されることになる。

また、明王朝の雲南統治の結果と影響が大きく誇張された。これは、まず明時期の雲南への移民の数、及び雲南の人口に反映されている。『滇粹』によると、明の武将であった沐英は雲南を征服した後に19万人を各郡県に駐留させた。さらに数年後、江南と江西の250万余りの移民が雲南に移住させられた。その結果、沐英が雲南を管轄した10年足らずで、雲南への移民は400万人まで増えた¹⁸。

明の雲南統治を通じて漢人の人口が増加したことを指摘する一方で、『滇粹』の編集者が強調したのは、人口の増加に伴い、雲南が深く漢族の風俗に染まった、ということである。『滇粹』によると、沐英の影響で雲南の人々が「『史記』と『漢書』などを読むことを好み、常に手から書物を離さない」¹⁹ よ

- ▶18 佚名（1908）「雲南世守黔甯王 沐英伝」李根源・呂志伊編『滇粹』, pp.23-27.

- ▶19 佚名（1908）「雲南世守黔甯王 沐英伝」李根源・呂志伊編『滇粹』, pp.23-27.

うになったという。

しかし実のところ、沐英の時期には、最大15万人の兵士が雲南に駐留したと推測されている（古 2003）。また、儒教が全面に雲南に浸透していたのは、清中期のことであると指摘されている（劉 2017）。明王朝による雲南統治の結果が一方的に強調される『滇粹』の記述は、「周辺」に生きる人が、主流となる単一民族国家史観の影響を受け、一連の「歴史記憶」を再構築した結果と言える。

3.2 雲南と南明

1644年、大順を国号とする李自成の軍が北京に侵入し、明の皇帝が自死した。これは実質的に明王朝の終焉と見られている。しかし、明の時代に雲南を管理した沐氏一族は、南明という1644年から1662年まで中国の南方に残存した複数の政権のうち、最後まで生き残った永暦政権を守るために命を捧げた²⁰。

1652年、鄭成功の軍事保護を得た永暦政権は、広西北部から、雲南・貴州の大部分、ないしは広東の沿海部までの地域を一時的に確保したが、清軍の南進によって止むを得ず貴州を経て雲南に逃げ込んだ。その後、「流賊」と呼ばれ、李自成と離反した反乱軍の残部を率いた将軍であった李定国は沐氏一族の協力を得て、永暦政権の存続を一時的に確保した。しかし結局、1662年にミャンマーにいた永暦帝は昆明まで引き戻され、処刑された。

この「永暦西狩」と呼ばれる南明の歴史は、明の皇帝であると考えられた永暦帝が実際に帝国の周辺地域に足を運んだことから、『滇粹』の編集者によって非常に重視されていた。その理由は、「永暦西狩」が『滇粹』に反満の材料を提供すると同時に明と雲南の関係を説明できる点にあると考えられる。

『滇粹』の冒頭に引用された文章は『求野録』である。「求野」という言葉は、「中国が礼を失えばこれを野に求める」という文に由来するとされる。これは、盧（2008）の指摘からすると、もし「礼」の正統である中原の秩序が崩壊すると、中原の周辺、つまりまだ中原化されていない地域には失われた「礼」を保つ役割がある、ということである。

編集者が『滇粹』の冒頭に『求野録』を載せた理由は、明の皇帝が清の脅威で中国の周縁地域に行かざるを得ない苦境のなか、「周辺」としての雲南が南明の存続に大きな貢献をしたことを暗示したからだろう。しかし、『滇粹』の文章を史籍の原文と対比すると、両者の間に根本的な違いが見られる。

まず、『滇粹』においては永暦政権に不利な情報が削除された。例えば、永暦帝一行が雲南からミャンマーに進行した時の記録について、原文に記された「民間から盗み取る」、「人家を焼いて財物を掠め取り、人をおどし殺す」²¹などの行動は、『滇粹』では「民間の供給が潰れる」や「王を迎える」²²などに書き換えられた。

次に、史籍の原文にある王朝の更迭を決定する「天」に関する議論が、『滇粹』から消えた。『求野録』以外にも、『滇粹』には「永暦西狩」を巡って、1877年に日本で出版された『元明清史略』から転載した『永暦帝紀』など、

▶ 20 南明の歴史に関して、本稿は主にStruve（1984）の研究を参照し、永暦政権が終わった1662年を南明の結末と見なす。

▶ 21 鄧凱（1936）『求野録』中国歴史研究社編『中国内乱外禍歴史叢書（第11冊）』神州国光社、pp.225-228.

▶ 22 佚名（1908）「求野録」李根源・呂志伊編『滇粹』pp.5-12.

- ▶23 石村貞一（1877）『元明清史略・卷之三・明帝由榔』東生亀治郎
- ▶24 鄧凱（1936）『也是錄』中国歴史研究社編『中国内乱外禍歴史叢書（第11冊）』神州国光社，pp.207-208.
- ▶25 趙爾巽等撰（1927）『清史稿』卷二百二十四・列伝第十一・李定国伝（北海道大学所蔵）
- ▶26 劉彬（1908）「晋王李定国列伝」李根源・呂志伊編『滇粹』，pp.52-58.
- ▶27 郭影秋（1960）『李定国紀年』中華書局，pp.5.「烏蒙」は雲南の東北部にある地域である。「辺牆」は万里の長城のことをさす。
- ▶28 宋潜虚（1908）「諸生薛大観伝」李根源・呂志伊編『滇粹』，pp.63.

複数の書籍が引用されていた²³。しかし、『滇粹』の編集者は、史籍の中で「天運」が常に移転する前提で行われた「古来より亡国しない国はない」²⁴などの議論を削除した。それに加えて、南明の皇帝が満州族に追い払われ結局処刑されたという、漢族にとっての「屈辱的な歴史」を集中的に掲載したことを通じて、『滇粹』には、強い排満意識が見られた。

以上の分析より、『滇粹』の編集者は、「天運」を意識的に排除し、明末期に生まれた「亡国」の思想を清末に高揚したナショナリズムへと移植しようとする動きが分かるだろう。その結果、南明期に旧朝廷に忠誠心を示し清に抵抗した英雄と庶民は、反満世論の高揚により「愛国」の系譜に編入されるようになった。

3.3 国のための死：英雄と庶民の物語

李定国は、永暦帝を守るため雲南の辺境で戦死し、永暦政権の存続に関して決定的な働きをした人物である。正史の文書を『滇粹』の記録と対比すると、李定国の出身について一つ根本的な相違点がある。『清史稿』には、李定国の出身地は陝西と記載されている²⁵。しかし、『滇粹』には李定国が雲南人であると記され、「定国は […] 雲南にある貧しい家の子である。幼い時に両親を失い、よりどころがない。関中にいる同じ李姓の売人に引き連れられて陝西に入って榆林で生活した」²⁶と説明されている。『滇粹』に収録された文章は、編集者が執筆したものではないが、編集者の一人であった李根源は、辛亥革命後に再び李定国が雲南人であることを主張した。李根源は「定国が烏蒙に産まれ、馬を販売して辺牆に至る。父が死んだ後〔定国は〕張献忠と李自成に従い、流賊をしたが結局王に封じられる」²⁷という詩文を残した。

偶然、雲南に進入した李定国が、なぜ『滇粹』で褒揚され、しかも雲南人と見なされたのか。排満の英雄に対する希求こそが、李定国が重視された根本的な理由であると考えられる。このような明末の人物が「民族英雄」として登場することは、「反満」の意味を君主への忠誠心から愛国的なイメージに変貌させたと指摘されている（Croizier 1977：50-51）。

李定国のような英雄のみならず、『滇粹』には庶民が清に反対した「殉国」の物語が編集されている。『滇粹』に紹介された明の終結を聞いて死を選んだ雲南の官僚は「今中原に進入し主宰となる者は、既に我が族類ではない […] [我々ができるのは] 死を以って国を報じることのみである」²⁸と嘆いた。ここで強調されているのは、儒教の道徳に従って君主に示す忠誠心より、むしろ異族政権である清に抵抗するための死である。

そのほか、『滇粹』の編集者は『明季忠烈録』という表題で、あわせて47篇の清に反対して殉国した雲南人の物語を収録した。これらの物語は、「清に抵抗するための死」という図式で単純化されて、ついには庶民までも反満の序列に取り込むに至った。

天下の倫理にしたがって興った明と清の王朝の交替は、清末になると「天」の存在が意識的に排除され、民族革命としてイメージされるようになった（秦2008）。その結果、『滇粹』の編集者が伝えたい「雲南の精神」は、「国史」の規範に一致させられた雲南史と、徹底的な満州人排斥に変わったと理解で

きるだろう。しかし、漢族単一民族国家史観の影響で作られた雲南の歴史叙述は、もう一つ問題を孕んでいた。それは、雲南の非漢民族の先住民が大漢族主義的な「国史」に入る根拠はどこにあるのか、ということである。

4 「国史」の中の土司：「天下」と「国家」の重なり合い

『滇粹』が描いた雲南史から見れば、雲南の先住民が漢族単一民族国家に入る必然性は低いだろう。しかし結果的には、非漢民族とみられる土司は確かに雲南で起きた辛亥革命に参加した。この意味で、『雲南』の編集者が直面した問題は、土司を「国史」に組み込む根拠を与えると同時に、将来の国民国家の中に土司の存在をも保証する論拠を提出しなければならないということであった。

4.1 刀安仁の登場

『雲南』の第九号にある寄付者の名簿には、「郝君安仁」という名前があり、寄付金「日幣五拾元」と明記されている²⁹。「郝安仁」という人物は、本名が刀安仁であり、雲南西部の騰越出身のタイ系の土司である。つまり、その祖先が前文で示された「金齒百夷」と呼ばれた人々である。

1906年に日本に留学した刀安仁は、孫文と出会って同盟会に加入してから、清朝反対を決意し、明清時代に皇帝に授与された「刀」姓を嫌い、江南応天府出身の祖先の旧姓である「郝」を取り戻したとされている（武内 2008：189-224）。

当時、日本に滞在した同盟会の主要メンバーの一人である宋教仁が残した日記には、刀安仁について以下のような記述がある。「その祖先は南京上元の人であり、明朝の時期に沐英に従って雲南を征服して来て、遂に干崖宣撫使に命じられたと言い、[宣撫使を]世襲することが今まで変わっていないと言う」³⁰。

刀安仁の言動からみると、少なくとも日本に滞在している頃、反満の立場に立ってアイデンティティを形成してきたとも言える。刀安仁が郝に改姓し、同盟会に参加するのは、彼が王朝への反逆心を抱いたと同時に、自分が中原出身の人々の末裔だと考えたことを意味している。言い換えれば、刀安仁がもつ土司という身分を階層の低い先住民と区別することの象徴として、中原の人、つまり「漢族」との関係を証明できるものとなっていた。

4.2 土司の漢族祖先

刀安仁が自らの祖先を「南京上元の人」と認めたのは、根拠のない話ではない。現存する刀氏一族の家譜によると、「一世祖の郝忠国は、南京応天府上元県の人土である」と記されている（刀 2008）。このような先住民が自らの祖先を「中原からの人」と認めた移民伝説は、刀氏のみならず、王朝の

▶ 29 雲南雜誌社（1907）「本社名譽贊成員」『雲南』九号

▶ 30 湖南省哲学社会科学研究所古代近代史研究室校注（1980）『宋教仁日記』湖南人民出版社，pp.292.

雲南進出により中原と周辺の関係強化の結果として、明清時代の雲南社会の上層部に普遍的に存在したと考えられている（趙 2013）。

しかし、土司の移民伝説が『雲南』で再び登場したのは、『雲南』の編集者も移民伝説を利用し、土司が漢族であると説明しようとしたためであると考えられる。

『雲南』十四号には李根源が執筆した「雲南之土司」という文章がある。これは、『雲南』で初めて系統的に土司を紹介したものである。管見の限り、公刊された先行研究では分析されていない新しい史料であり、この文章は「天下」から「国家」への転換期に土司がいに「国史」の論述に巻き込まれたかを説明するための貴重な材料を提供してくれる。

まず、文章中にある土司は共に漢族を祖先とする。『雲南之土司』に列挙された土司の漢族の祖先には三つの特徴が見られる。第一に、刀氏一族と同じように、明の時代に雲南を征服した中原の人物が土司に封じられた点である。例えば、南甸土司、蓋達土司と干崖土司である。第二に、「反乱」を「平定」するため、現地を征伐して管理を行い、秩序を回復させた漢人が祖先となった点である。典型的な例は、隴川宣撫司である。第三に、漢族が土司の職を世襲する点である。例えば戸撒土司と臘撒土司である³¹。

次に、同時代の新聞雑誌の文章と「雲南之土司」を比較すると、『雲南』の編集者が天下の倫理を借りて土司が漢族の祖先をもつと説くことで、土司が単一民族国家に進入する「歴史的な根拠」を提供しようとした意図が見られる。『新民叢報』に掲載された騰越を紹介した文章には次の文がある。「騰越の周辺にいる種人は、現地の有力者が伝えたところ、百種以上がいた。今日確実に調査を行い、十六種しか得られなかった。その余りは天演の慣例に従い、[なくなった] のである。これから人と社会がさらに進歩し、淘汰もますます酷烈になると、各種の人は僅少な姿を地球上に残し、我々の歴史を研究する一つの材料になることができるか否か」³²。

無論、『新民叢報』の文章で使われた「天演」や「淘汰」に反映された社会進化論の思想こそ、当時主流を占めた言論であった。このような考えからすれば、雲南にいる先住民が「進化」の法則に沿って絶滅に至るのは不可避であろう。ところが、『雲南』は、土司の漢族祖先を説く一方、特に土司以外の先住民について言及する際に、進化論的な言い方を避けながら、王朝の人口統計の単位である「戸」から先住民の人口状況を紹介した。

漢王朝の時代から、戸籍の有無は天下の「内」か「外」を判断する重要な基準となっている（趙 2015）。従って、『雲南之土司』の作者が「種」の区別を問わず「戸」を統計したのは、土司以外の雲南の先住民を「漢」と認めないとしても、戸籍を有する彼らが居住したところが王朝に属し、さらに雲南に属する地域だと説明しようとしたからだろう。

4.3 「同胞」と呼ばれる土司

なぜ『雲南』は土司の移民伝説を利用し、土司の漢族の祖先、及び戸籍をもつ先住民を「雲南之土司」というタイトルで包括的に表現したのか。そこには、当時の雲南が直面していた深刻な領土危機という背景がある。

▶ 31 李根源（1908）「雲南之土司」『雲南』十四号

▶ 32 楊堯銳（1906）「雲南騰越片属物産種人鉅廠調査」『新民叢報』第四卷，十五号

領土意識の出現は、曖昧な境界しか持たない天下が国民国家に取り代わられた結果の一つである。19世紀の半ばから、それぞれの勢力をミャンマーやベトナムに伸ばしたイギリスとフランスは、雲南の国境線を巡り清の政府と数回にわたる交渉をしていた。しかし当時、雲南の国境問題を処理した官僚は、明確な領土意識を持たず、騰越以西の「野人山」一帯を「甌脱地」、つまり天下から離脱した不毛な地域と見なすことがあった（朱 2004）。

20世紀になると『雲南』には、近代的な領土意識が現れ、中国-雲南-土司という図式を通じて、土司が雲南、ないしは中国全国の局面にとって重要であることが強調されていた。

ああ！ 長い夜がいつ明けるともしれなく、大きな災難が起きる最中である。我が滇人は自ら隔てを置き、自ら境界を分けることはしない。彼らの責任感を高め、団結の力を増やせ、それを以て我が各土司同胞を勧めて励み、彼らを助けて導くことをすべきである。その人民を啓発し、その土地を開墾し、その行政を改良し、その教育を普及させ、その実業を振興する。[彼ら]と共に[物事を]はかり、共同に行動する。意気揚々、奮闘努力。現在あるものを保護し、そして失われたものを回復する³³

▶ 33 李根源 (1908) 「雲南之土司」『雲南』十四号

「我が各土司同胞」という言い方により、漢族にしても、土司にしても、両者が「同胞」であるため、同じ祖先をもつようになった。ただしその条件として、文章の作者である李根源の考えからすると、民族的な意味では「漢族」と「土司」を同一視したとしても、政治的な意味では行政、教育、経済などの近代的な手段を通じて土司を「開発」しなければならない。土司を「同胞」と呼ぶのは、「ネーション」の起源と見なされる遥かな過去から無限に延伸していく国民国家の未来まで土司の存在が保証されたことを意味している。

『雲南』の編集者は近代的な領土問題によって触発された雲南の非漢民族のアイデンティティの危機を感知し、民族議題に対して社会進化論のような主流の世論を避ける一方、天下が雲南に作用した結果を利用して独自の「民族論」を展開していた。このような「民族論」は、土司が自らの祖先は漢族であると主張することに対して、漢族の知識人もそれを認めたという、「国史」と王朝史が捻れた異種混交的な産物であると思われる。

『雲南』の論述に基づけば、「天下」と「国家」が一時的に重なり合い、つまり、ナショナリズム論における文化的な単位と政治的な単位が特殊な条件で脆弱な一致を達成したように見える。しかし、この幻影は革命後、間もなく崩壊した。

4.4 「夷漢対立」

1911年10月27日、辛亥革命の幕開けとなる武昌蜂起の17日後、騰越で蜂起が発生した。同盟会会員であった張文光が兵士を率い、騰越城を占拠し、清の支配を覆すことに成功した。翌日「滇西都督府」が成立され、張文光が都督に就任した。同時期に騰越にいた刀安仁は騰越蜂起に参加しなかったが、のちに自らも「滇西都督府都督」と称したとされる（曾 2015）。騰越蜂起の

- ▶ 34 佚名（1912）「節録雲南土司刀安仁致章太炎先生書」『大共和日報』3月31日第1版

- ▶ 35 謝本書編（1981）『雲南辛亥革命資料』雲南人民出版社，pp.164-165.

- ▶ 36 德宏州志編委会弁公室編（1985）「記二十年代干崖の一次大兵災」『德宏史志資料（第7集）』德宏州民族出版，pp.168-172.

直後、刀安仁は依然として「漢」の立場から言論活動を行ったようである。1912年に刀安仁が書いた文書には、「雲南全域が正常に戻り、偉大な漢族が再び恢復することを慶す」³⁴ という記述がある。

1912年1月、張文光との矛盾が顕在化したため、刀安仁は南京を訪れて孫文の支持を求めようと計画した。しかし、南京に赴いたところ、刀安仁は雲南軍都督府に告発され、南京で逮捕された後に投獄された（刀・楊 1984：83-87）。

雲南軍都督府が南京に送った電文では、「干崖の刀安仁は夜郎自大であり、狂悖で謬妄である。彼のこの性格は各土司の中最も目立つ。今度の騰越蜂起では彼は最初の時に革命を仮に支持し、兵士と食糧を援助する意欲があったが、続いて入城してから都督を自称し […] さらに各土司が彼の独立を許し、漢人の反抗を扇動した。彼は底意地が悪く、死罪に処してもなお許せない」³⁵ という罪状が掲げられた。

1912年8月、刀安仁は釈放されたが、翌年彼は北京で病死した（刀・楊 1984：90）。1924年、騰越では刀安人の息子の三男が「夷を興し、漢を滅す」の旗を掲げ、城内に突入し殺戮を行うという事件が起こった³⁶。

これによって、革命の前に土司と漢族が『雲南』で達成した脆弱な合意は徹底的に破壊された。ここでの土司はむしろ夷の意味に戻り、漢と対立する独立の概念となる。しかも、「土司は夷である」という言説は両者の対立を深める一方、土司自身のエスノセントリズム的な意識を醸成し始めた。

5 結論と課題

本稿は、19世紀の末から20世紀初頭にかけて、雲南の知識人が新聞雑誌を通じて「国史」のモデルに沿って雲南の歴史を再建した運動について文献資料に基づくテキスト分析を行った。大漢族主義的な論述により、独自の歴史を持つ雲南は、単一民族国家の規範を押し付けられた。また、雲南にいた非漢民族の先住民たちは、漢族の「同胞」と呼ばれ国民統合の一環として、「国史」に巻き込まれた。伝統的な中国の価値規範と統治秩序であった「天下」は、雲南出身の知識人に利用され、文化的な単位にして政治的な単位である国家と一致させられた。

本稿で行った検討によって、冒頭で提起した二つの課題、つまり近代主義的なナショナリズム論と「国史」の構築論を中国研究に適応することの妥当性、および辛亥革命に参加した非漢民族の評価について、ある程度その解に近づくことができるだろう。

まず、近代の到来により、伝統的な中国の天下の秩序と新しい国民国家観念との間に大きな断絶が生まれた。ネーションは、「近代の発明」として、その起源が一連の歴史記述によって構築されたと言えるだろう。過去の事実に対して、歴史事件が繰り返し再解釈される中で、客観的な位置づけは無視あ

るいは曲解された。大澤（2007:82）が指摘するように、ネーションの「起源」についての幻想は、「ネーションの本質を象徴すると見なされている遺跡や歴史的事実の内に対象化されている」。本稿はネーションの近代性を肯定するが、同時に過去の歴史の存在を否定することはしない。想像の共同体論は「あたかも白紙の上に新しい言語を書き付けるよう」（トンチャイ 2003:44）であると指摘されたが、本稿は過去の史実をネーションの歴史を構築する重要な材料とみなす。しかし、その一方で、本稿は前近代の共同体がネーションに転換する「必然性」を疑問視する。なぜかという、本稿の分析のとおり、超自然的な存在である「天」の支配との断絶、言い換えれば個人の均一化を目指す近代的行為主体を創成する「大いなる脱埋め込み化」（テイラー 2010:69-96）は、確かに世紀の転換期に発生したからである。

次に、非漢民族と考えられている人々、特に直接に革命に参加したタイ系の土司は、「夷」ではなく、「漢」のアイデンティティーを持って反満革命を行った。従って、現在中国で行われている研究、特に刀安仁について「少数民族愛国心」などと結論づけるのは、現実との齟齬が大きいと言える。本稿が検討する時代には、伝統的な意味の「族類」と現代の「民族」やエスニック・グループが明確に区別されず、二つの概念が常に混在していた。現在では非漢民族と見なされる雲南の少数民族は、当時必ずしも自民族のアイデンティティーを持って行動したわけではない。そのため、清末から中華民国期にかけて、雲南の民族問題に触れる議題を説明する時には十分に注意を払わなければならない。さらに言うと、「中国」を議論する際には具体的な時代と地域の背景を設定する必要がある。

最後に、中国にとって国民国家の建設は、現代に至っても極めて重要な課題である。清の領域をほぼ全面的に接収した中華民国は、漢族単一民族国家の発想を放棄し、「漢、満、蒙、回、蔵」が共生する「五族共和」論を主張した。しかし、「単一民族国家」的な発想は依然として影響を与えつづけている。松本（2011:212-236）は、孫文の思想は根本的には漢族への民族同化を目的とする「徹底的な民族主義」だと批判している。また、1920年代から形成してきた「中華民族」は、近代国民国家の規範に沿って構成された複合的な概念であると指摘されている（黄 2017）。中華民族がその国家の構成員となる「国史」は、近代以降の「中国」を連続性をもつ歴史の主体として創造しようとする運動の結果である。

本稿は、世紀の転換期に起こされた漢族単一民族国家史観の影響で雲南の知識人が描いた雲南史と「民族論」を検討した。分析の結果をふまえた上で、清末から革命の成立までの雲南ナショナリズムを研究するためには、少なくとも二つの面の議論をさらに進める必要がある。すなわち、国民国家を建設するため国家、政府および国民のあるべき関係と位置づけを規定する「国民論」と、より実践的に国民を動員し、革命の参加を実現させる方略としての「革命論」である。この二つのテーマは、今後の研究の主な焦点になるだろう。

謝辞

本稿は、2019年9月14日から16日まで東京大学で開催された2019年度「中国学の再創生」サマーセミナーにおける口頭発表もとに、内容を大幅に修正したものです。本稿の執筆にあたり、終始懇切丁寧なご指導を賜りました、指導教員の金山準先生、ご支援くださった方々、特に博士論文の一部を拝読させていただいた吉川次郎先生に感謝いたします。また、匿名の2名の査読者から詳細なコメントをいただきました。ここに記して感謝いたします。本稿における瑕疵は全て著者の責任です。

参考文献

- Croizier, Ralph C. (1977) *Koxinga and Chinese nationalism: history, myth, and the hero*, East Asian Research Center, Harvard University.
- Dikötter, Frank. (2015) *The discourse of race in modern China*, Oxford University Press.
- Evans, Grant. (2014) The Ai-Lao and Nan Chao/Tali Kingdom: A Re-orientation, *The Journal of the Siam Society* Vol. 102, pp.221-256.
- Levenson, Joseph R. (1968) *Confucian China and its modern fate: a trilogy*, University of California Press.
- Smith, Anthony D. (1999) *Myths and memories of the nation*, Oxford University Press.
- Struve, Lynn A. (2004) Confucian PTSD: Reading Trauma in a Chinese Youngster's Memoir of 1653, *History and Memory* Vol. 16, pp.14-31.
- Struve, Lynn A. (1984) *The Southern Ming, 1644-1662*, Yale University Press.
- Wang, Q. Edward. (2002), China's Search for National History, edited by Wang, Q. Edward; Iggers, Georg G. *Turning points in historiography: a cross-cultural perspective*, University of Rochester Press.
- Zarrow, Peter. (2003) Old Myth into New History: The Building Blocks of Liang Qichao's "New History", *Historiography East and West* Vol. 1, pp. 204-241.
- 曹成章 (2010) 『民主革命先驅刀安仁』 中国社会科学出版社
- 陳力・孫代興 (1986) 「辛亥「騰越起義」述評」『雲南民族學院學報』(10), pp.24-30.
- 程美寶 (2006) 『地域文化与国家認同：晚清以来「廣東文化」觀的形成』三聯書店
- 刀安祿・楊永生 (1984) 『刀安仁年譜』德宏民族出版社
- 刀承銳 (2008) 「干崖刀郁氏世系家譜」『德宏師範高等專科學校學報』(6), pp.1-5.
- 卞冬磊 (2015) 「識「時務」者為俊傑：晚清知識伝型与中国現代報刊の興起 (1896-1898)」『伝播与社会學刊』32, pp.209-233.
- 段金生 (2015) 「政党演進与边疆政治：同盟会在云南的組織与發展」『中国边疆史地研究』(2), pp.79-89.
- 方国瑜 (1981) 「李京『雲南志略』概説」『思想戦線』(2), pp.11-16.
- 方漢奇 (2002) 『中国新聞伝播史』中国人民大学出版社
- 甘懷真 (2007) 「重新思考東亞王權与世界觀：以「天下」与「中国」為關鍵詞」甘懷真編『東亞歷史上的天下与中国概念』台大出版中心
- 葛兆光 (2017) 『歷史中国的内与外：有関「中国」与「周边」概念的再澄清』香港中文大学出版社
- 古永繼 (2003) 「元明清時期雲南的外地移民」『民族研究』(2), pp.69-78.
- 黃興濤 (2017) 『重塑中華：近代中国「中華民族」觀念研究』北京師範大学出版社
- 蔣中礼・王文成 (2011) 『雲南通史近代前期 (公元1840-1919年)』中国社会科学出版社
- 金觀濤・劉青峰 (2008) 『觀念史研究：中国現代重要政治術語的形成』香港中文大学出版社
- 李仁淵 (2007) 「思想轉型時期的伝播媒介：清末民初的報刊与新式出版業」王汎森編『中国近代思想史的轉型時代』經聯出版
- 劉明坤 (2017) 「明清雲南科学家族芻議」『教育与考試』(6), pp.35-47.
- 劉志偉・孫歌 (2014) 『在歷史中尋找中国：關於区域史研究認識論的對話』大家良友書局
- 盧国龍 (2008) 「礼失求諸野」義疏『世界宗教研究』(2), pp.1-8.

- 魯西奇 (2014) 『中国歴史的空間結構』 広西師範大学出版社
- 木基元 (1996) 「『雲南』雑誌及其革命影響」『雲南社会科学』(3), pp.79-84.
- 秦燕春 (2008) 『清末民初の晚明想像』 北京大学出版社
- 沈松僑 (2000) 「振大漢之天声：民族英雄系譜与晚清的国族想像」『中央研究院近代史研究集刊』33, 77-158.
- 王東傑 (2016) 『国中の「異郷」：近代四川の文化、社会与地方認同』 北京師範大学出版社
- 王柯 (2014) 『中国、從天下到民族国家』 政大出版社
- 王明珂 (1997) 『華夏辺縁：歴史記憶与族群認同』 允晨文化
- 王明珂 (2008) 「王崧の方志世界」孫江編『新史学 (第2卷)』中華書局
- 王明珂 (2009) 『英雄祖先与弟兄民族：根基歴史の文本与情境』中華書局
- 温春來 (2008) 『從「異域」到「旧疆」：宋至清貴州西北部地区の制度、開発与認同』三聯書店
- 温春來 (2014) 「中華民族不只是想象共同体」觀察者網
https://www.guancha.cn/WenChunLai/2014_03_04_210587.shtml, (参照2019-10-20)
- 宣勤 (2003) 「民族国家理念在『雲南』雑誌中の凸現」『學術探索』(10), pp.28-31.
- 曾業英 (2015) 「傣族同盟會員刀安仁「蒙不白之冤」嗎」『近代史研究』(2), pp.92-114.
- 趙世瑜 (2015) 「從移民伝説到地域認同：明清国家的形成」『華東師範大学学報 (哲学社会科学版)』(4), pp.1-10.
- 趙世瑜 (2013) 「身份变化、認同与帝国边疆拓展—雲南騰沖『董氏族譜』(抄本) 札記」『西北民族研究』(6), pp.67-76.
- 張灝 (1999) 「中国近代思想史的轉型時代」『二十一世紀』52, pp.29-39.
- 周立英 (2007) 「从『雲南』、『滇話』看晚清雲南留日学生的近代思想」『雲南民族大学学报 (哲学社会科学版)』24, pp.103-108.
- 朱昭華 (2004) 「薛福成与滇緬边界談判再研究」『中国边疆史地研究』(14), pp.43-51.
- 石島紀之 (2004) 『雲南と近代中国：「周辺」の視点から』 青木書店
- 王鼎 (2017) 「雑誌『湖北学生界 (漢声)』から見た清国日本留学生の諸活動」『現代社会文化研究』64, pp.141-158.
- 大澤真幸 (2007) 『ナショナリズムの由来』 講談社
- 川野明正 (2013) 『雲南の歴史：アジア十字路に交錯する多民族世界』 白帝社
- 氣賀澤保規 (2017) 「隋時代の雲南：饒氏から南詔への節目の時代」氣賀澤保規編『雲南の歴史と文化とその風土』 勉誠出版
- 佐藤公彦 (2015) 『中国の反外国主義とナショナリズム：アヘン戦争から朝鮮戦争まで』 集広舎
- 孫倩 (2014) 「清末留日学生思想と行動：雑誌『河南』を例として」『ソシオサイエンス』20, pp.83-99.
- 武内房司 (2008) 「清末雲南タイ系土司の近代化ヴィジョン：刀安仁とその周辺」塚田誠之編『民族表象のポリティクス 中国南部における人類学・歴史学的研究』 風響社
- チャールズ・テイラー (2010) (上野成利, 訳) 『近代：想像された社会の系譜』 岩波書店
- トンチャイ・ウィニッチャクン (2003) (石井米雄, 訳) 『地図がつくったタイ：国民国家誕生の歴史』 明石書店
- 林謙一郎 (2001) 「『中国』と『東南アジア』のはざまで：雲南における初期国家形成」山本達郎編『岩波講座東南アジア史第1巻』 岩波書店
- 林謙一郎 (1999) 「『統一』を可能にしたもの：南詔・大理国の国家形成」『アジア遊学 (特集 少数民族の謎の歴史：西南中国からシャム文化圏へ)』 勉誠出版
- 松本ますみ (2011) 「孫中山の「徹底した民族主義」：近代的統一への幻想」王柯編『辛亥革命と日本』 藤原書店
- 溝口雄三 (1989) 『方法としての中国』 東京大学出版会
- 横山廣子 (1997) 「少数民族の政治とディスコース」青木守他編『民族の生成とその理論 (岩波講座文化人類学第5巻)』 岩波書店

- 吉川次郎（2017）「雲南同郷会と『滇話報』」『国際教養学部論叢』10（2），pp.57-79.
- 吉川次郎（2008）『清末南方各省の言論と社会：雲南・広西の雑誌メディアを中心に』東京大学博士論文
- 渡辺信一郎（2003）『中国古代の王権と天下秩序：日中比較史の視点から』校倉書房

